

「管理社会」再検討

The 'Control Society' Revisited

トム・ギル

- ①問題提起
- ②変容する管理社会の概念
- ③個人観察
- ④結論

【論文要旨】

日本は「管理社会」だという指摘は1960年代以降日本の社会学・哲学の大きなテーマの一つであり、ほぼ決り文句になったと言えよう。しかし、管理社会の定義は実に様々で、日本はどういう意味で管理社会であるのか、今ひとつははっきりしない。このエッセーでは、管理社会論争を簡単に振り返って、著者が見た日本社会と管理社会のいくつかのモデルとを比較し、日本を管理社会と呼ぶのは必ずしも適切ではないと結論する。

荒川幾男(1970年)の「管理社会」は、無敵の管理層と無力な被管理層との間の一方的な力関係に立脚する権威主義的な国家だが、日高六郎(1980年)はより「柔軟」な管理を論じる。ここでは国家中心教育や経済的な豊かさを通して、国民は管理に協力する。栗原彬(1982年)は、日本の国民に「内面支配のメカニズム」があると指摘し、社会管理を精神的に定義する。庄司興吉(1989年)は国際関係をモデルにし、日本の社会管理はアメリカの世界制覇を国内で再生した現象として見なす。篠原三郎(1994年)は、「国家」ではなく、「会社」を管理社会の中心として見なす。

学者だけではなく、マスコミや一般の人々も、日本を個人の自由が比較的少ない国として見なすことが多いが、日本滞在12年のイギリス人である著者は、いくつかの面から見た日本社会には意外と「自由」の場が広いという印象を持つ。長年調査している「寄せ場」(日雇労働者の青空労働市場)では、社会慣例に従わない生活ぶりがとくに警察などに邪魔されることはない。むしろ、トラブルが生じた時に警察が適切に関与しないという問題が存在する。そこにあるのは「管理社会」というよりも「寛容・杜撰社会」というイメージである。

寄せ場は「特殊地帯」で例外的な場所だとしても、主流社会にも管理より杜撰が見られるケースが多い。子育て・教育・公共道徳・インターネットなど、様々な分野で社会管理が十分に機能していない。その一因は、自由民主党・官僚・大企業・天皇といった、かつて日本の社会を支配した社会組織が、すべて衰微していることにあるのではないだろうか。

キーワード：管理社会、寄せ場、公衆道徳、治安、都市問題

①……………問題提起

1979年、ロンドン。当時高校生だった私は、全英高校生組合の幹部として、「体罰反対」デモに参加した。当時はパンク・ロック全盛の時代であり、反政府運動は活発であった。100人しかいなかったデモ隊の脇を100人ほどの警官が歩く。警官は、私たちの侮辱を浴びながらも、ロンドン中心部の交通を止め、私たちの言論の自由を丁寧に守ってくれる。しかし、デモ隊の怒りは完全に非論理的な警察差別ではなかった。その2、3週間前、別のデモの際、ブレアー・ピーチ（Blair Peach）という学校の先生が警官に殴り殺されるという有名な事件があった。イギリスの警察は人権擁護であれ、暴力行使であれ、なんでも命令通り行動するという評判がある。妙な言い方であるが、イギリス人の日本人観のステレオタイプと似ているところがあるのではなからうか。良いか悪いか問わず、とにかく命令に従う。管理された人間。そして日本の社会は警察隊のようなもので、とても機能的に動くが、命令によって恐ろしい存在にもなりうるというイメージ。果たして事実なのだろうか。

もし日本社会が警察社会だとすれば、私が長年研究した人たちは警察社会の離脱者といえるかもしれない。1993年から1995年まで横浜・寿町という「寄せ場」でフィールドワークを行った。「寄せ場」の語源は「労働者を寄せる場所」。日雇い労働者が仕事を探すために集まる都市の一地带である。日本の「三大寄せ場」は大阪・釜ヶ崎、東京・山谷、そして横浜・寿町である。寄せ場は路上の社会である。日雇い労働者たちが道路で飲む、道路で話し合い・小便・喧嘩をする。場合によっては、路上で寝て、結局路上で野垂れ死にってしまう人もいる。

寄せ場の運動家の話を聞くと、日雇い労働者は警察によって弾圧されているという。確かに、釜ヶ崎と山谷には大型交番が存在し、「マンモス交番」と呼ばれている。釜ヶ崎には12台の監視カメラが街頭に設置されているが、たくさんあるヤクザの事務所には向けられていない。カメラの標的は、労働者が集まる場所、そして組合や運動家の事務所である。だが、労働者の日常生活に警察はあまり関わっていないというのが私の印象であった。暴動や殺人事件が発生しない限り、お巡りさんは見当たらない。反って、人が怪我をして、路上で出血しているのに、助けてくれる警察官がいないのを問題だと感じる時があった。寄せ場で人殺しをしても、わずかに懲役8年程度が普通の判決である。厳しい管理というよりむしろ、管理が杜撰な点や日雇い労働者への蔑視が問題点であり、日常生活に介入しないことはむしろ良い点だと私には思えた。

私がイギリスに帰ってまず気づいたのは、住んでいたオックスフォードの中心部が監視カメラだらけだということであった。現在のイギリスでは、寄せ場のようなところに行かなくても人が毎日撮影されている。フランスもそうである。最近のフランス政府の統計によると、街頭の監視カメラはそろそろ15万台に達する見込みである[Vitalis 1998]。一体日本と西欧の、どちらが管理社会なのだろうか？

日本の「本質」が論じられる時、アメリカ合衆国が概念的な「other」（反対のケース）として持ち出されることがよくある。管理社会論の場合、アメリカはやはり「自由の国」で、個人の権利を集団の利益よりも強調するとされる。このイメージは現実にどれほど近いだろうか。日本の寄せ場

に当たるアメリカのスキッド・ロー (skid row) に関する文献を一つ紹介してみよう。アメリカの社会学の名作、*You Owe Yourself A Drunk* (「1回酔っ払ってみてもいいじゃないか」) [Spradley 1970]である。アメリカのホボ (hobo 渡り労働者) の話だが、私が期待していたロマンチックな浮浪者の物語ではない。スブラドリーが描写する男達は生活の大半を刑務所で過ごしている。アメリカでは州によっては酒を外で飲むだけで逮捕される。酒のボトルを持っているだけで捕まることさえある。スブラドリーのインフォーマントの一人は11年間で114回逮捕され、58回投獄された。1回につき30日間や60日間だったが、合計すると、寄せ場によくある殺人罪の刑罰と変らない懲役8年間という計算である。スブラドリーはこれを「月賦払いの無期懲役」(“a life sentence on the installment plan”)と呼ぶ[同：195]。罪名は主に「往来での酩酊」や「浮浪」であった。ところが、これらホボがよく逮捕される理由、つまり酩酊や浮浪、は日本ではそもそも「犯罪」ではない。こうした振る舞いを比較的寛大に見る伝統が根強い。表で酒を飲むのが犯罪であったなら、警察は日雇い労働者だけではなく、サラリーマンや大学の教員の大半も逮捕せざるを得ないだろう。

スブラドリーの調査は確かに今では古いが、90年代に入ってから、アメリカの刑務所収容人数がますます増えている。1997年、アメリカの人口10万人に対して645人が刑務所に収容されていた。イギリスとフランスは90人程度で[Wacquant 1998：8]、日本は39人だった[法務省統計1998年：777]。警官の人数を見ても、日本は国民556人当たり警官一人という割合であるが、アメリカは379人に一人、フランスはさらに多く、268人に一人である[朝日新聞 1998：236]。

一体、どこが「自由の国」で、どこが「管理社会」なのだろうか？

②……………変容する管理社会の概念

「管理社会」は1960年代後半から流行になった表現である[庄司 1989：10]。Control society と英訳されることが多いが、これはそもそも日本独特の表現で、決まった英訳はないと思われる[同]。定義は実に様々である。まず荒川幾男[1970]は次のような定義を提案する：「『管理するもの』と『管理されるもの』とがはっきり分けられていて、管理エリートがすべての実権をにぎり、管理されるものは窮屈な組織のなかの下積みに閉じこめられて、機械の部分品のように操作され、自由を失っている……未来が決定されている感じ、一口でいえば、疎外感であろうか。」[荒川 1970：12]。

荒川の管理社会のイメージは戦後日本の高度成長時代を反映している。田舎から外れた人間が大都市に移って、非人間的な会社や組織に吸い込まれ、上からの管理に抵抗できない。産業の機械化、社会の匿名化とその中の個人の無力さがテーマになっている。

その10年後に提起された日高六郎の管理社会論では、多少概念が変わっている[日高 1980]。オーウェルの「1984年」は一つの極端な管理社会のモデルとして捉えられるが、そういう露骨な権威主義を日本に適用すれば「権力の永久支配ではなく、むしろ権力の動揺と混乱を招きます」[同：106]。だから日本の管理社会はそれと多少違う：「大衆支配は硬いしかたではなく、柔軟なしかたで行われる。一元的ではなく、多面的多目的に行われる。とくに、生活、文化、教育、意識の管理が重要になっている」[同]。つまり、オーウェルのモデルを「ハードな管理社会」だとすれば、日本は「ソフトな管理社会」である。露骨な政治的な管理より、洗脳教育や物質的な豊かさによって、

管理されることに対する違和感が消し去られる。管理されているという意識すらない。荒川のいう「疎外感」は消えている。オーウェルの『1984年』のように引用されてはいないが、ハクスリーの『素晴らしき新世界』[Huxley 1932]はむしろ日高のモデルに近いと思われる。

その直後の栗原彬の管理社会論になるとその内面化がさらに一步進んで、日本の国民は「内面支配のメカニズム」[同：xii]に、人形のように操られて自発的に服従するものになってしまう[栗原 1982]。著者は経済プロセスに国家が介入するという意味で、近代国家はみな管理国家だとする。ただ日本型管理社会の場合、「天皇制的発想様式」というもう一つの強力かつソフトな社会管理のメカニズムがあるとしている。即ち、天皇制に由来するものである、①物事のあいまい化、②「中央」への価値集中、③本音と建前の使い分け、④「われわれ」と「かれら」という認識枠といった発想様式が、日本独特の内面支配のメカニズムをかたちづくっているというものである。

庄司興吉の管理社会論[庄司 1989]では、おそらく一番ラディカルな定義が見られる。「管理社会」は「全般的かつ抑圧的な管理のいきわたる社会」とする[同：10、下線は原文のまま]。日本国内の管理社会はアメリカによる世界の制覇が、国家レベルで再生されたものだという指摘である。そして、日本にかぎらず、いわゆる「先進」社会は知識の程度が上がれば社会管理も厳しくなる。彼の言葉でいうと先進社会は「知識化の基礎のうえにたえざる管理化の進展する社会」[同：244]。しかし、テクノロジーの発展によって、中央政権がより徹底的に国民を管理できるという「常識」が最近揺らいできた。特にインターネットによって、個々人間のコミュニケーション管理は難しくなり、個人が膨大な情報を手にするようになった。この発展は必ずしもビッグ・ブラザーに有利だとは限らない。

最後に紹介する管理社会論は篠原三郎[1994]のものである。この本では主なフォーカスが「国家」から「会社」に移動する。会社は労働者だけではなく、独占資本主義によって消費者をも支配する。とくに大企業同士が相互の株を大量に保有していると、経営者と株主の力のバランスが崩れて、独占的な構造ができ、それが次第に社会全体に広がる。篠原によると（現代資本主義においては）「法人株主、その多様な発展形態、それを通じての支配構造を全社会的に確立している。」[同：75]。篠原は一般的な理論として記述しているが、この指摘には日本の系列会社の制度が反映されているに違いない。

確かに、以前アメリカの評論家 Vance Packard が指摘したように、消費者の購買行動は、必ずしも自分が思っているほど自由で合理的だとは限らない。パカードの名作、*The Hidden Persuaders* [Packard 1957, 「隠れた説得者」]では、工夫した宣伝にいかにか消費着の選択が影響されるかが描かれている。だが、「説得」や「影響」は「管理」と根本的に違う概念ではなからうか。しかも、日本の経済の大部分は独占ではなく、激しい競争の対象となっている。また、系列会社制度や大口法人株主制度は確かに管理的な色彩が強いが、この点は次第に日本の資本主義の強みではなく、むしろ弱点だと見なされるようになってきている。したがって、こうした会社タイプの社会管理は今後弱まっていくものと思われる。

③……………個人観察

(1) 管理社会の「安全弁」

まず自信を持って言えるのは、もし寄せ場が管理社会だとすれば、例外的な存在が極めて多いということである。私の日雇い労働者の友人はかなり独特な生活をしているが、彼らはめったに邪魔されない。私が寄せ場で見たのは彼らの極めて自由な日常生活だった。その反面、前述のように日雇い労働者が病気か怪我で道で倒れても、救急車がこない、警官が無視するというケースはたくさんあった。差別や蔑視はあると思うが、その差別の性質は「強制的な管理」ではなく、「無関心な放置」に見える。「出る杭（くい）は打たれる」のではなく、「出る杭は腐食するまで放置される」という感じである。

ところで、寄せ場は特殊地帯、即ち管理社会を機能させるために必要な安全弁ではないかとの反論があり得る。社会の規則に従えない人間を「姥捨て山」のようなところに集中させ、残り99%の順応する人々の邪魔をさせないことによって、社会全体をより機能的に管理しているのだ、と。

果たしてそうなのか。私の印象としては、日雇いだけではなく、サラリーマンのような「まっとうな男達」も往來で酔っ払ったり、かなり放埒に遊んだりすることもあるが、これも特殊地帯（盛り場）または特殊時間帯（午後10時ごろ以降）に限られると言えるかもしれない。身分、場所、時間帯によって、この日本の管理社会は例外を認める。そういう自由な場があるからこそ、管理社会が機能するというような意見がある。確かにオーウェルやハクスリーのフィクションの管理社会でも、そうした特殊地帯があった。「1984年」では、プロレタリア階級が特に管理や観察をされないスラム街で暮らしている。「素晴らしき新世界」でも、2万人ぐらいの「原始人」は米ニュー・メキシコ州の、フェンスに囲まれた地帯で昔のままの生活が許されている。

この安全弁論は正しいのか。それとも、「例外的」として処理できないケースもあるのだろうか。自分の観察から述べると次のとおりである。

現在私が暮らしている地域（京都府・宇治市）では、子供たちがあまり管理されていないという感じがする。夜になっても、学齢前の幼児が一人で道を歩いている。親は子供がどこにいるか分からないケースが多いし、どうやらそれを気にしない親もいるようだ。交通事故や痴漢に遭う可能性も十分ある地域なのだが、車で学校に子供を迎えに行く母親は私の妻ぐらいである。日本の「ソフトな管理社会」のキー・メンバーは「過保護」な母とされるが、これもむしろ非管理＝放任のケースではなからうか。しかも、小学校の中でさえ管理が不十分だというのが、イギリス人である私の印象である。例えば、昼休みの時間にグラウンドで遊んでいる子供は管理できる大人に見守られていない。誰が誰を苛めているか分からない。イギリス人の眼で見ると、子供に自由を与えすぎているのではないかという反直観的な印象である。

管理教育は管理社会の不可欠な要素であるはずで、管理社会論者はやはり日本の学校教育を問題視するケースが多い。生徒たちは皆同じ制服を着て、同じ知識を頭に入れられて、そしてなるべく同級生と同じように振る舞うように指導される。皆と違った振る舞いは罰を受ける、あるいは苛められる。即ち管理社会の研修である。

しかし、同時によく指摘されるのは、「試験地獄」である。エリート会社に就職するために、エリート大学に入学、試験にさえ合格できれば、何でもよし。つまり、日本の教育には順応主義とエリート主義という二つの原理が働いている。この二つの原理がしばしば互いに矛盾し合う。

私が初めて来日したのは1983年だった。当時は、駿台甲府高等学校という私立の男子高校で英語を教えていた。学校の隣りに、甲府工業高等学校があった。この二つの高校は別の惑星ではないかと感じるくらい違っていた。甲府工業の方は管理教育そのものであった。毎朝自転車を通ると、校舎の前では坊主頭の男の子たちが真っ黒な制服を着て、長い真っ直ぐな列を作って、朝の体操や応援団の練習をやっている。体育の先生が命令を叫ぶと皆同時に同じように動く。これこそ「1984年」だ。冷や汗をかいて見つめた私であった。ところが、駿台高校の校庭に入ると雰囲気は全然違う。髪の毛は長い。制服を着る子もいれば、着ていない子もいる。ボタンを外している。スニーカーの紐がガラガラと解けている。ラジオ体操などはなし。

工業は公立、駿台は私立。工業はあまり卒業生を大学に送らない、駿台は東大を意識している。駿台は予備校の系列で、生徒が名門大学にさえ入れれば、服従や集団意識や連帯責任などはどうでもいい。スポーツとなると、工業は高校野球の強豪、駿台はダメ。しかしテニスといった個人主義のスポーツでは駿台は割合強い。学校のモットーは「愛情教育」である。子供が悪いことをすると、罰より、カウンセリングを受ける。

この隣同士の高校を見ただけでも、日本の教育に一般論は無理だと分かる。管理主義とエリート主義は両方とも問題点があるだろうが、幸い、両方を同時に実施するのは極めて難しい。

以上は高校の話だが、大学となると管理社会論者にあまり言い分はない。勉強であろうが日常生活であろうが、学生はほとんど管理されないのが現実ではなかろうか。遊んでいても何とか卒業させてもらえる。これは厳しい職業生活の前の必要なバカンスだという説がある。つまり、大学生活ももう一つの特設地帯・時間帯、もう一つの安全弁だということだが、その後で続く社会人生活はどれくらい厳しく管理されているのだろうか？

私は日本の大企業に勤めたことがあるが、懸命に働く人もいれば、全然働かない、仕事に無関心な人もいた。だが、会社から後者の人に対する懲罰、警告、管理などは特になかった。イギリスの会社ならば即解雇されるような人がのんきに編み物などを会社の机でやっていた。やはり、植木等タイプの「無責任男」はある程度日本の社会では許される。「窓際族」は日本の大型組織の現象で、ほかの資本主義の国ではあまり見当たらない。村八分は社会管理の手段とされても、その残りの「二分」に給料・賞与・健康保険などが含まれている会社版の村八分はかなり寛容な面があると思わざるを得ない。

ところで、企業社会と云えば、日本が長引く不況から抜け出すには「規制緩和」が必要だという意見がほぼ世間の常識になってきたが、この不景気の原因をそもそも作ったのは銀行の無責任な貸し出しだった。バブル経済の黄金時代で金に酔ってしまい、ほとんど無制限にヤクザや投機家に融資し、そのお陰で普通の国民は自宅を買えないくらい不動産価格が上がってしまった。そしてバブル崩壊で、この国は10年間もの不景気に突入してしまった。一体、これら銀行や金融機関は誰によって管理されていたのか？ 厳しい規制はどこにあったのだろうか？

(2) 管理社会の隙間

日本の管理社会には安全弁と呼べるようなものもあれば、隙間と呼ぶべきものもあると思う。

数年前、日本の政府は酒の自動販売機の使用時間を制限し、夜11時から朝6時までの利用を不可とした。これは未成年者の飲酒を「管理」するための措置である。ところが、私が（ごく希に）午前1時頃自動販売機を訪れると、必ず酒が手に入る。但し、ビールはダメである。大きな、華々しいビール販売機は必ず「販売中止」である。だが、よく見ると隣りの小さな、錆び付いた、故障中に見える焼酎ワンカップの機械に200円を入れると品物が出るではないか。あるいは、レモン・ジュースだから販売中止になっていないと思われるものは、よく見ると、「レモン酎ハイ」ではないか。私の観察が確かならば、日本の酒店の7割ぐらいはこの法律を破っている。警察はこの事実を知らないはずはないが、（袖の下をもらっているからか、自分が夜に酒を買いたいからか）見て見ぬふりをする。これが管理社会であれば、かなりいい加減な管理社会である。

しかし、あるソフト管理の論者はそのいい加減さこそがポイントだと指摘することがある。杉本のいう“friendly authoritarianism”（親しい権威主義）[Sugimoto 1997: 245-259]は一つの例である。これこそソフト管理である。厳しいルールがあって、そのルールを破ると大変な目に遭うという管理社会ではない。場合によって、国家の法律を破ってもツケが回ってこない。だが紙に書いていない、法律にはなっていない社会的なルールを実施する組織が色々ある。例えば、「小さい集団の中の相互監視」[同: 246-9]。町内会や会社のQCサークルのような組織では、近所の住民同士が、組織を困らせる振る舞いを牽制する。

だが、町内会のような組織にはもう一つの、非常に大事な役割がある。それは、荒川版管理社会の要素である「疎外感」を癒すことである。東京のような大都市、あるいは三井物産のような巨大な会社は「迷子」になりやすい環境である。杉本が問題視する小さい集団は、皆それぞれ政治的な意味もあるが、基本的に人と人が知り合う場所ではなからうか。杉本は、人がチームのメンバーであるという幸せな気持ちを十分評価していないのではなからうか。

また、小学生の担任教師の家庭訪問も、強制的なスパイ活動のように杉本は批判する。だが、私の経験は全く違う。先生の家庭訪問は重大なコミュニケーションの手段である。先生が生徒たちの家庭事情を多少なりとも把握するのは大事なことであり、親と話す機会も大事である。イギリスの先生はなかなかそういうサービスをやってくれない。そのほとんどは放課後すぐ自宅に帰る、あるいはバブに行く。

もう一人のソフト管理社会論者はオランダ人のカレル・ヴァン・ウルフレン (Karel van Wolferen) である。彼は1989年の話題作、*The Enigma of Japanese Power*で、日本の権力は「不思議」(enigma)だと論じている。権力の中心は政治家ではなく、官僚でもなく、天皇でもない。権力は定義しにくい「日本の制度」(“the Japanese system”)にある。日本人論を厳しく批判するヴァン・ウルフレンであるが、皮肉なことで、この「不思議な国：日本」という物語は日本にエキゾチックなイメージを植え付ける日本人論そのものである。こういう議論の展開こそ、エドワード・セイド[Said 1978]がオリエンタリズム (Orientalism) として批判したものである。ウルフレンの本の表紙には次の文章がある。“Inside Japan, nothing is quite as it seems.” (日本の中では、外面と実際が完全に一致するものは何もない)。随分露骨なエキゾチシズムだと思うが、この十年間

で一番影響力の強いジャパン・ブックはこれではなからうか。

(3) 管理する集団の相互矛盾

日本の力の構造は確かに複雑であるが、ヴァン・ウルフレンが指摘するほど不思議なものではない。政府の機関であれ、大企業であれ、社会集団には権力のヒエラルキーが必ずある。ところが、実際は、レベルとレベル、集団と集団の間に、必ず摩擦があり、管理の意味についても解釈の違いが見られる。

かなり古い文献だが、きだみのるが1950年代に小さな村落でフィールドワークを行った際、村の道徳原理は国家のそれと非常に違うことに気づいた。とくに村の道徳は内と外によって変わる：「国家法律の違反は部落に害をもたらさなければ、部落は別に気にしない。例えば、闇市、賭博、禁猟期の狩猟、選挙制度を弄ったり…… 部落は単にこういう行動を不法と定義しない」[Kida 1957: 202]。

本来、きれいに整理された管理社会ならば、中央から地方まで、つまりピラミッドの上から下まで一貫性を持って国民を管理するはずなのに、日本の場合（どこでもそうだろうが）、国と都道府県、都道府県と郡市、郡市と町村、などによって利権が違うし、道徳原理はお互いに矛盾しあう。沖縄…水俣…三里塚…中央と地方の間の激しい闘争の例がいくらかもある。そして個人レベルでも、管理に抵抗する、管理社会を阻むケースがたくさんあるのではないか。私の前の仕事場の近くに団地がある。団地の前に狭い道路が走る。その道路には「駐車禁止」の看板がたくさん出ている。「警告：ガラージ法違反。交通事故の原因になったり緊急車両の通行を妨害する路上駐車をやめましょう。桃山南団地自治会。伏見警察署。伏見土木事務所。住宅都市整備公団」…… と当局の証明が並んでいるが、毎朝百台以上の自動車がその看板の真ん前に駐車している。そこ以外は車を置く場所がないので、市民はそろって、桃山南団地自治会、伏見警察署、伏見土木事務所、住宅都市整備公団の意向を完全に無視している。

そうだ。差別的に聞こえるなら申し訳ないが、日本人は（他の人と同様に）毎日平気な顔をして法律を破っている。交通違反…賭け麻雀…タバコのポイ捨て…立ち小便…電車のただ乗り…売春…脱税…日本人の生活は小さな反乱の連続である。国家に服従するのは逃げられない時だけ。

それに、当局の取り締まりは甘い。切符がなくても目的地で精算機で買う……あるいは「無くした」と言えば、ただで改札口を出ることもある。私もやったことがある。母国のイギリスで切符なしで目的地に着くとすぐさま罰金がつく。つまり、「無くした」という話は自動的に嘘だとされる。

近頃、管理社会の伝説を問う材料がますますニュースに出ている。不景気のせいでホームレスの数はドンドン増えているが、この人たちを助ける能力もなければ弾圧する決意もなさそうである。東京の隅田川沿いのテント村は毎月1回警察によって撤去させられているが、2、3時間経つとホームレスの人たちが戻ってきてまた同じテントを立てている。この象徴的な追い出しは他の日本の大都市にも見られる。充実した社会福祉対策もなければ、永久的に追い出す権威主義もない。中途半端な嫌がらせで終わってしまう。

全く違う例だが、1995年の地下鉄サリン事件を起したオウム真理教に対する国家権力の態度は

病的なほど寛大だとしか言えない。事件の前にもこの集団の危険性を示す証拠が充分あったのに警察は何もしなかった。事件の後でも、オウムは破壊活動防止法が適用される団体として指定されなかったし、現在はまた勢力が盛んになりつつある。日本国憲法で保障される信教の自由は、虐殺事件を起しても守られるということである。また最近では世界のインターネット上の児童ポルノグラフィの大部分が日本発だという問題がマスコミに出ている[Kageyama 1998 等]。この現象の原因は表現の自由の尊重なのか、それとも警備の無能力なのか、まだ議論されているが、いずれにせよこの問題を見れば日本は決して管理の厳しい国に見えない。ヤクザの中途半端な取り締まりも有名な話だが、日本では悪質な行動が色々な形で許されると言っても過言ではなからう。

④……………結論

どのような社会でも、その社会なりの管理・自由のパターンがあるはずである。どういう行動が認められるか、認められないかということは、歴史的・環境的・経済的・文化的な経験によって変わってくる。日本という国が、とくに他の国より管理的であるとは思えない。寛大あるいは杜撰な面が相当に目立つ。この寛大・杜撰の範囲はあまりにも広く、「安全弁」や「隙間」として仕切ることにはできないというのが、私の感想である。

さらに、年々日本の社会の管理制度は弱まっているといえる。それには少なくとも四つの原因がある。

1. 自民党の独占権力は戦後の管理社会の大きな要素だったが、1993 年以来日本の政治はその長年の安定性を失ってきた。政治家が長引く不景気に無力であり、尊敬できる存在でも、オーウェル的な意味での畏怖の対象でもなく、単なる「どうすればいいかわからないおじいさんの集まり」でしかなくなっている。
2. 官僚は同様に、誰にも「偉い」と思われていない。接待や汚職は昔からあったが、景気がいい限り、これも寛大な国民によって許されていた。しかし現在の不景気は大蔵省のせい、官僚は血税を吸い取って国民をだましている……これはもう「庶民の常識」と言えるぐらいの時代ではなからうか。
3. 大企業も、不景気以降「終身雇用」や「年功序列」を徐々に廃止しつつある。こうした慣行はそもそも少数のエリート企業でしか見られなかったものであるが、日本の本質的な要素として指摘されるまでになった。しかし今となっては、慢性的な労働不足の時代の経営者の労働力確保のための制度としか見えない。景気は潮のように引いて、「日本独特」とされたものが流されて消えた。現在、日本の労働者が社則を破らないのは、ある特殊な「忠実性」からではなく、失業を恐れているからにほかならない。
4. 天皇が日本の管理社会の中心だと栗原ら社会学者が指摘しているが、昭和天皇が崩御した 1989 年以来、皇室は随分象徴的な意味を失い、高齢者に対する以外は大した影響力がないと思われる。

どこをみても、「管理する」側が力を失って、「管理される」側がそれを尊重する理由がなくなりつつある。現在の日本には「ビッグ・ブラザー」が不在だ。かわりに、森喜朗という「太ったおじ

さん」しかない。どちらかと言えば、ちょっと寂しい感じもする。

参考文献

- 朝日新聞社 1998 「ジャパン・アルマナック」
荒川幾男 1970 「管理社会」講談社
栗原 彬 1982 「管理社会と民衆理性」
篠原三郎 1994 「現代管理社会論の展望」こうち書房
庄司興吉 1989 「管理社会と世界社会」東京大学出版会
日高六郎 1980 「戦後思想を考える」岩波新書
法務省 1998 「日本統計年鑑」平成10年版
Huxley, Aldous, 1932. *Brave New World*. Garden City: Doubleday, Dovan & Co.
Kageyama, Yuri, 1998. "Japanese Internet Policing Criticized." Associated Press, November 24.
Kida, Minoru, 1981 (1957). "The Rules of the Hamlet." In Michiko Y. Aoki and Margaret B. Dardess eds., *As the Japanese See It: Past and Present*. Honolulu: University of Hawaii Press.
Orwell, George, 1949. *1984*. London: Secker and Warburg.
Packard, Vance, 1957. *The Hidden Persuaders*. New York: D. McKay Co.
Said, Edward W., 1978. *Orientalism: Western Conceptions of the Orient*. London: Routledge and Kegan Paul.
Spradley, James P., 1970. *You Owe Yourself a Drunk: An Ethnography of Urban Nomads*. Boston: Little, Brown.
Sugimoto, Yoshio, 1997. *An Introduction to Japanese Society*. Cambridge, New York and Melbourne: Cambridge University Press.
Vitalis, Andre, 1998. "Big Brother is Watching You." In *Le Monde Diplomatique* (English edition), September 1998 p. 15.
Wacquant, Loic, 1998. "Imprisoning the American Poor." In *Le Monde Diplomatique* (English edition), September 1998 pp. 8-9.

(東京大学社会科学研究所)

(2001年2月28日 審査終了受理)

The 'Control Society' Revisited

Tom GILL

1979, London. At the time I was on the executive committee of the National Union of School Students, and I took part in a demonstration against corporal punishment. This was the punk rock era, and antigovernment activity was on the rise. There were only a hundred of us in the demonstration, with a hundred policemen marching beside us. The policemen silently absorbed the insults we hurled at them, and kindly stopped the central London traffic for us so that we could exercise our democratic right to free speech. It made me wonder: What is oppression? What is freedom? What is the 'control society'?

1993-5, Yokohama. Fieldwork in a *yoseba*—a district where day labourers gather—called Kōtobuki. The day labourers would drink, converse, urinate and fight, all in the street. Reading the comparative literature on skid row, the American equivalent of the *yoseba*, I found that in many parts of the USA, Americans practicing this kind of lifestyle would repeatedly be arrested, with some of them ultimately spending more than half a lifetime in prison in the form of accumulated short sentences. In the United States you can be arrested just for carrying an unconcealed bottle of alcohol in the street. So just where is the 'Land of the Free'? And where is the 'control society'?

Looking more broadly at the *yoseba*/skid row comparison, it is striking that while the American authorities have been trying to eradicate skid row, their Japanese opposite numbers tend to view the *yoseba* as functional and have generally maintained them. The basic idea seems to be that "even misfits need somewhere to go."

The 'Control Society' (*Kanri Shakai*) is the title of a 1970 book by Arakawa Ikuo, and over the years the concept has become a powerful element in the image of Japanese society through the works of sociologists and philosophers including Arakawa, Hidaka Rokurō (*Sengo Shisō o Kangaeru*, [On Post-War Thought]1980), Kurihara Akira (*Kanri Shakai to Minshū Risei*[The Control Society and Popular Rationality]1982), Shōji Kōkichi (*Kanri Shakai to Sekai Shakai*[The Control Society and Global Society]1989) and Shinohara Saburō (*Gendai Kanri Shakairon no Tenbō*[Prospects for Contemporary Control Society Theory]1994). In English-language academia, the image of Japan as a highly-controlled society has been conveyed by many books, including

Hidaka's English-language work, *The Price of Affluence: Dilemma of Contemporary Japan* (1984), and the works of Sugimoto Yoshio (e.g. 'Friendly Authoritarianism', Chapter 10 of *An Introduction to Japanese Society* [1997]).

Control society theorists define the term in various ways, but the common point is an emphasis on the power of organizations, such as the state, the authorities, the company, the neighborhood or the family, over the individual. However, these organizations were conspicuous by their absence in the *yoseba*, where I observed an extremely free lifestyle.

It may be argued that the *yoseba* is a special zone, a necessary safety valve to enable the control society to function. Even if one points out, say, that not only day labourers but 'respectable' white-collar workers may often be seen drunk in the street in Japan, the safety-valve theory states that this behavior also tends to occur in special zones, whether defined spatially (entertainment districts) or chronologically (after 10 pm). Japan's control society allows for exceptions, and it is these zones of freedom that allow the great majority of people, places and time to be controlled. After all, the fictional control societies described by Orwell and Huxley also allowed for these special zones—it may be argued.

Is the safety-valve theory correct? Or are there instances of personal freedom that cannot be disposed of as 'exceptional'? Several candidates emerge from my own experience:

- * In my neighborhood, children do not appear to be controlled much at all. They walk the streets alone from kindergarten age. Parents frequently do not know where their small children are, nor does this seem to bother them particularly. The overprotective mother is one aspect of the control society model, but the mothers I know could more plausibly be accused of negligence.
 - * In schools, too, control seems inadequate to my British eyes. For example, children are left to play entirely without adult supervision at break times. There is no way for the staff to know who is bullying whom. Such a state of affairs would be condemned in Britain.
 - * At universities, students are barely supervised at all, in their studies or their daily lives. They can relax, safe in the knowledge that a way will somehow be found to allow them to graduate. Some argue that university life should be seen as a kind of extended holiday prior to the harsh realities of working life. Another safety valve?
 - * I have had the experience of working for a large Japanese enterprise, where I could not help noticing that some employees were working very hard indeed and others showed no interest in their jobs and did not work at all. The latter were not punished, warned or in any particular way controlled. People who would have been fired long ago by a British company were still sitting at their desks, engaged in activities such as knitting. It would appear that to some degree the 'irresponsible man' immortalized in the songs of Ueki Hitoshi is accepted in Japanese society.
-

I conclude that each society has its own pattern of control and freedom. Historical, environmental and cultural experience will all have their influence on which activities are considered acceptable and which are not. It is hard to believe that Japan in particular is more controlled than other societies. Elements of tolerance and negligence are quite prominent. If it is a control society, it certainly has a huge number of 'safety valves'—so many that one wonders whether Japan is a control society at all.

key words: control society, *yoseba*, public morality, policing, urban problems
